

フラザスルフロン

諮問理由	化学構造	作用機序	用途	評価資料
暫定基準	スルホニル尿素系	ALS 阻害	除草剤	抄録

【試験成績の概要】

1. 暫定基準値は、別添のとおり。基準参照国は日本のみ。評価書は農薬抄録に基づき作成したが、米国における 2005 年の評価書が入手出来たことから、一部参照した。
2. 各毒性試験の実施年及び GLP 適用の有無については、評価書たたき台の目次参照（省略）。

【事務局における気づきの点】

1. 動物体内運命試験における血中濃度推移の T_{max} は、ピリジニルスルホニル基標識のもの（[pyr- ^{14}C]フラザスルフロン）とピリミジン環標識のもの（[pym- ^{14}C]フラザスルフロン）で、大きく異なっていた（但し AUC は同じ）。
2. ぶどう及びトマトを用いた植物体内運命試験において、可食部の残留放射能は極めて低かった。ぶどうの処理葉中では、D が最大 16.9%TRR 検出された。
さとうきびを用いた植物体内運命試験において、主要な残留成分は親化合物であり、その他、茎部の主要代謝物として D が最大 10.4%TRR 認められた。
3. 作物残留試験では、親化合物及び代謝物 D、F 及び K を分析対象として試験が実施され、いずれも検出限界未満であった。
4. ラットで認められた腎臓への影響は、追加試験の結果も併せて考えると、 $\alpha 2\mu$ グロブリンの沈着によるものと推定された。長期試験では、ラット雄の腎臓に対する影響が、雌よりも低い用量まで認められた。
5. ラット及びマウスにおいて、検体投与による腫瘍の発生頻度増加は認められなかった。
6. ラット発生毒性試験において、母体毒性の見られた用量（最高用量）で、心室中隔欠損が認められたが、追加試験では再現されなかった。ウサギでは、胎児への影響は見られなかった。
7. 遺伝毒性試験では、原体、代謝物とも、全て陰性であった。

【評価を受ける部会（予定）】：評価第一部会